

V 第9回北洋漁場に関する水産海洋研究座談会

主催 社団法人 大日本水産会
水産海洋研究会

日時：昭和46年3月25日(木) 13:00 ~ 17:00

会場：大日本水産会 会議室

コンピーナー：佐野 蘊(遠洋水産研究所)

主題：ベーリング海におけるシロザケ漁業

座談会の主旨： 昭和27年に再開されたサケ・マス漁業は、資源保護のための国際的規制を受けながら、幾たびかの転機をへて、この20年間に変容してきた。このうちの母船式サケ・マス漁業においては、近年の操業の善し悪しを左右してきている主要な資源の一つとして、ベーリング海のシロザケの消長があげられる。昨、昭和45年の漁期には、当初の予測以上に豊度の高いシロザケの来遊があり、いわばハブニングな現象として関係者を安堵させた。今年はどのような帰趨になるであろう。今回の座談会は、このベーリング海のシロザケに焦点を合わせて、水産海洋学のおよび漁業生物学的な検討を行なうことを意図した。

話題および話題提供者

1. 1970年の北洋サケ・マス資源の評価ならびに
1971年の北洋サケ・マスの資源状態の予測 藪田 洋一(遠洋水産研究所)
 2. ベーリング海における近年のシロザケ漁業について 吉原 英吉(日本水産株式会社)
 3. ベーリング海のシロザケについて 広瀬 寛(日魯漁業株式会社)
 4. ベーリング海の海洋学的特性 大谷 清隆(北海道大学水産学部)
 5. ベーリング海に來遊するシロザケの系統 米 盛 保(遠洋水産研究所)
-
1. 1970年の北洋サケ・マス資源の評価ならびに1971年の北洋サケ・マスの資源状態の予測

藪田 洋一(遠洋水産研究所)

1. 1970年のサケ・マス來遊状態

1) ベニザケ

東カムチャッカ系の沖合における推定漁獲量は例年より少なく、約1/3と思われる。沿岸漁獲量は近年の2~3倍であり、そ上親魚数も近年の約50%増となっている。したが

って、総来遊量は1969年と略同程度であったと判断される。

西カムチャッカ系の沖合における推定漁獲量は近年平均であり、沿岸漁獲量は1968年や1969年に比べると数倍であった。またその親魚量は1969年と同程度であったこと等から、総来遊量は1969年と同程度か、さらにそれを上回ったものと判断される。

ブリistol系については、過去に例をみない大量の親魚が確保された1965年級からの回帰年に当るので、大きな期待がもたれた。しかし、母船区域への魚群出現は東方の極く一部の海域に限定された。得られた情報の分析によると、総来遊量は予期に反し、1965年のそれを下回ったと判断される。

以上のことから、極東系ベニザケの総来遊量は1969年なみの水準であったと考えられる。

2) シロザケ

東カムチャッカ系の沖合における推定漁獲量は1968年および1969年をかなり上回り、沿岸漁獲量も同様に両年を若干上回った。したがって、総来遊量は近年平均を若干上回り、特に1968年および1969年をかなり上回ったと判断される。

西カムチャッカ系の沖合における推定漁獲量は近年平均より多く、沿岸漁獲量もまた1968年、1969年のそれを若干上回った。そこで、総来遊量は1968年や1969年のそれより幾分多かったと判断される。

オホーツク系では、沖合の推定漁獲量は1969年と同程度であり、また沿岸漁獲量も前の2年を上回っている。したがって、総来遊量は1968年、1969年の両年のそれを幾分上回ったものと思われる。

アムール系の沖合における推定漁獲量は、1968年と1969年の平均位であり、1969年よりは多くなっている。また、沿岸漁獲量は1968年より少なかったが、1969年よりはかなり多かったことから判断して、総来遊量は1969年のそれを大巾に上回ったと考えられる。

樺太・北海道・本州系の総来遊量は、北海道系が近年の平均を上回り、その他は平均なみであったと判断される。

以上を総括してみると、極東系シロザケの総来遊量は、1968年や1969年のそれを上回った水準にあったと考えられる。

3) カラフトマス

東カムチャッカ系の沖合における推定漁獲量や沿岸漁獲量から判断して、前の偶数年である1968年の水準なみの来遊があったと思われる。

太平洋系と称するものの中には、多くの地方群が含まれている。そのうちの西カムチャッカ系とオホーツク系は最近の偶数年なみの水準での来遊があり、東樺太や千島系は1968年と同程度の来遊があったと考えている。太平洋系としては1968年と同様な水準であったと判断している。

日本海系には沿海州、アムール、西樺太系の各地方群が含まれ、このなかでは西樺太系の資源が大きい位置を占めている。総来遊量は1968年と同程度と判断している。

以上を総括して、極東系カラフトマスの総来遊量は1968年の水準と同程度と判断している。

4) ギンザケ・マスノスケ

この兩種とも近年の平均的水準の来遊があったと判断している。

以上魚種別に述べたが、1970年における極東系サケ・マスの総来遊量は1968年の水準をいくぶん上回ったと判断している。

2. 1971年サケ・マス来遊予測

1) ベニサケ

東カムチャッカ系魚群は近年安定した状態にあり、1965年および1966年におけるその親魚数もまた近年の平均に近い数となっている。さらに、1970年の沖合漁獲物の年令組成を考慮すると、近年の平均に近い来遊があるものと予測される。

西カムチャッカ系魚群についてみると、1965年および1966年のその親魚数は近年では高い方の部類に属していること等から、近年の平均を上回る来遊があるものと期待される。

ブリストル系では、今年が1970年のBig Yearに次ぐ年であること、また再生産関係や過去における変動の経緯等からみて、1961年および1966年なみの来遊があるものと予想される。

以上のことから、極東系ベニザケは近年の平均水準なみの来遊があるものと予測している。

2) シロザケ

東カムチャッカ、西カムチャッカおよびオホーツク系の各地方群では、1967年級の4年魚と1966年級の5年魚の来遊豊度は低いことが予想される。しかし、主たる地方群のアムール系では近年の平均水準に近い来遊が期待される。北海道・本州系も近年の平均なみ来遊があると考えられ、極東系全体としては1968年、1969年の水準を上回るものと予想される。

3) カラフトマス

東カムチャッカ系のもは奇数年豊漁型であり、また近年の資源状態も比較的に良好であることから、1969年なみかそれを上回る来遊があると考えられる。

太平洋系のもは全体として近年の資源状態は縮小していたが、最近年の奇数年級群は上昇傾向に転じたと思われる。そこで、1971年には1969年を上回る来遊豊度であろうと予測される。日本海系は近年の資源豊度は上昇しつつあり、1969年の来遊状態も良好であったことから、これと同程度の来遊があると思われる。

以上を総合して極東系カラフトマスは1969年の水準と同程度の来遊が期待される。

4) ギンザケ

近年の資源状態は安定しており、1971年は近年の平均的水準を上回る来遊が期待される。

5) マスノスケ

近年の平均的水準の来遊があると予測する。

以上を総括して、1971年に来遊するサケ・マスは、1969年の水準と同様か、或いはそれを若干上回るものと予測している。

以上、甚だ簡単に比較論で以て話したので、理解し難い面もあったかと思うが、御容赦願いたい。

2. ベーリング海における近年のシロザケ漁業について

吉原英吉(日本水産株式会社)

北洋さけ・ます漁業は、昭和27年の再開以来、本年で丁度20年目を迎える。

課題は、ベーリング海における近年のシロザケ漁業についてであるが、ここでは近年の母船式漁業の操業概要を中心にしながら、ベーリング海操業の経緯と、2, 3の特徴について紹介することにする。なお、(1)漁期・漁場については、船団操業の範囲と旬毎の漁場の中心から、(2)海況については、昭和33年以降13年間の水温平均値を用いてそれぞれ検討した。

1. ベーリング海操業の経緯

ベーリング海の操業が開始されたのは、昭和31年からである。

この年は、ソ連側の一方的通告によって、東経170度25分以西の海域が禁漁となり、日ソ間漁業交渉によって、7月中旬から、入域可能となるまで、この東側で操業しなければならなかった。中央漁場の主漁場は、6月に入るとこのラインの西側に移り、この東側の魚群分布は極めて薄くなる。従って、活路をベーリング海に求めざるを得なくなり、6月中旬から、ベーリング海に入域・操業が行なわれた。又、この年には、6月中旬から、ベーリング海専門船団として2船団が出漁し、1船団は、西経漁場、1船団はオリュートル漁場で操業が行なわれた。以上の操業結果から、ベーリング海南部には、列島をぬけて東進するブリストル系ベニザケが来遊すること、シロザケがベーリング海を北上し、大陸棚縁辺部に濃群を形成すること、オリュートル海域には、シロザケ、マスおよび漁期末には小型ベニザケが出現すること等が新たな知見として得られた。そのうち、特にブリストル系ベニザケが濃群を形成することが注目され、ベーリング海のベニザケ漁業が爾後脚光を浴びるようになった。昭和31年に引続いて昭和32年並びに35年と36年には、ブ系ベニザケの高密度の来遊があり、6月中～下旬にかけて、殆んど船団がベーリング海で操業した。当時は、専らベニザケ主体の操業であり、シロザケ漁場が遠いため、